HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本現代詩の比較文学研究 ： 田村隆一と２０世紀の世界文学の共振［全文の要約］
Author(s)	陳, 璇
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14570号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81442
Type	doctoral thesis
File Information	Chen_Xuan_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：陳璇

学位論文題名
日本現代詩の比較文学研究――田村隆一と 20 世紀の世界文学の共振―

本論文は田村隆一の IWP 体験と彼の後期の詩的創作の関係を明らかにすることによって、現代の日本詩人と世界文学の共振関係を検討する。日本現代詩と外国文学の関係については、多様化、分極化、隠微化の傾向が顕著に現れる。本論文ではそれらを「共振関係」と定義し、複眼的に考察する。田村は日本現代詩人の代表者として、戦後の日本詩人が国際文学交流に参加した先駆者である。彼は1967 年にインターナショナル・ライティング・プログラム（IWP）の創設人ポール・エングルの招請を受け、アメリカに渡航した。これを契機として、田村のスタイルは大きく転換した。彼は初期の緊迫した言語と抽象的な詩表現で戦争の危機と恐怖を表象する詩法から、ライト・ヴァースの様式による日常的な生活体験の写像に変容したと考えられる。

田村が初めて渡米した 1960 年代末期は冷戦期であった。それは、日本の現代詩が海外の読者と研究者に問題視されなかった時代であり、アメリカ国内のクリエイティブ・ライティング・プログラムが長足の発展を迎えた時期であった。1967 年にアイオワ大学で、ポール・エングルと妻の聶華苓は、全世界の成熟した作家を対象とする IWP を創設した。田村は IWP に招かれた最初の日本詩人であった。IWP からの招待は、当時の田村にとっては、個人的な経済状況の改善を意味する。また、作家の多様性と国際性が彼に強い印象を残した。IWP を通して、田村は一流とされる作家、詩人、学者と交流できるようになり、アイオワのクリエイティブ・ライティング・プログラムという「無限になる多次元のネットワーク」の中に位置づけられるようになった。

エングルと聶華苓は 20 世紀という「極端な時代」(ホブズボーム)の目撃者である。IWP に招待された作家の中には、民族衝突によって引き起こされた大規模な騒乱の被害者や、ナチス強制収容所の経験者、ファシズムへの抵抗運動を行った者がいる。これらの作家は文学者でありながら、20 世紀の「受難者」であると言える。全体主義への批判、言語と文学表現の自由を守ることおよび個的人間価値の強調は、冷戦期における IWP の基礎となる価値基準である。田村が IWP に

招待された理由は、彼が第二次世界大戦の敗戦国の詩人であったからではなく、戦争を体験した詩人として、戦争に対する反省および個的人間の意味を重要視した文学創作理念が IWP の創立者およびメンバーたちと一致したことにあると考えられる。そして、IWP という国際的な作家交流のプラットフォームで、田村の詩は解釈されるようになる。

田村の詩は、日本人のトラウマを言語化する一方、日本人の視座から「戦争」という惨禍が人間という共同体に残した傷口を呈示するため、世界的な読者の共鳴を喚起する力があった。したがって、彼の詩は「日本的」でありながら、「世界的」であると言える。例えば、散文詩「予感」において戦中世代の孤立感、敗戦によって導かれた破滅感と断絶感および、戦後の危機と恐怖に追われる緊迫感、という重層的な「感情の歴史」が演劇的に表象されている。田村は「死」と「生」のパラドックスに支配された人生および精神の破滅と再生の試練という戦間期に生まれた日本詩人たちに特有な苦難体験を詩によって表現した。一方、田村の詩は翻訳という装置によって、アイオワ大学の校内外で好評を博した。彼の英訳詩集も 1970 年代からアメリカで次々と上梓された。本論文は田村の詩「言葉のない世界」(World Without Words) を例として取り上げ、起点志向のタカロ・ウチノ・レントと目標志向のクリストファー・ドレイクの翻訳テクストを比較対照分析し、対極に位置する両者の翻訳ストラテジーを呈示した。

そして、「ライト・ヴァース」は後期の田村隆一がネガティヴな評言を受けた主要な原因とされている。本論文では田村に深く影響を及ぼした詩人 W.H.オーデンを取り上げて比較対照し、オーデンのライト・ヴァース論を援用して田村の詩風転換の底流に流れる一貫性を掲示した。田村を共鳴させたのは 1930 年代イギリスの急進的な左翼詩人オーデンではなく、政治に対する姿勢が慎重になり、創作にも脱政治的な傾きが顕著に表れる 1940 年代以降のアメリカ詩人のオーデンである。両者は、詩の目的を、政治観念の表出ではなく、生活の真実を伝えるのであるとし、集団における個的人間の重要性を強調し、ライト・ヴァースを詩的創作の帰着点としている。オーデンの詩句に基づいて、田村は自分の詩世界において「垂直－水平」という人間の実存の参照系を築き上げた。生と死、質と数、創造的な言語（母語）と死語（外国語）、個性的な人間と無個性な人間など、すべての対立項がこの参照系に位置づけられる。生涯、人間の実存に深く関心を持っていた田村にとって、ライト・ヴァースという様式は、大量生産と大量消費の現世界の危機に対峙する新たな姿勢である。

オーデンは人格を持つ人間を「個的な人間」(singular person) と定義し、「真理に対する共通の愛によって結ばれた『あなたとわたし』」のことを共同体と定義する。田村の「垂直的人間」はオーデンの「個的な人間」と同じ意味である。ポスト戦後時代、彼の理想的な共同体はアイオワだった。田村はアイオワで各国

作家と交流しているうちに、切実に人間の共同体の意味を体験した。本論文は田村の日記「アメリカからの手紙」(『詩と詩論 C』1972) と 1970 年代以降の詩作を中心にして、北米の異文化体験と彼の後期の詩作の関連性を明らかにした。

1960 年代のアメリカは、田村に大都市と田舎町の二極対立のイメージを強く印象付けている。前者はシカゴ、ニューヨークを代表として、「陰惨」、「動乱」、「犯罪」、「牢獄のごとき」としている。それに対して、アイオワは「小さな不変不動」の田舎町としている。シカゴを訪問した経験に基づいて、田村は「黄金の腕」(『ハミングバード』1992) を作り、1960 年代末のアメリカ大都市から 1980 年代の東京を見通し、政治上の欺瞞と経済上の空景気の発露の表現によって、金権主義社会における「垂直的な人間」の不在を掲示した。また、アイオワの日常生活を基に、田村は「暗緑色の遠心分離機」(『5 分前』1982) を作り、「緑の世界」のアイオワと 1980 年代の日本という「闇の世界」のコントラストによって、真である共同体と、権力に対する批判や自己決定を行う能力を喪失した「一次元的な人間」という「『非個性』という絶対値」で形成されている「固体」(「蟻」) という、対極の世界の光景を呈示している。

最後に、田村はアイオワの「腕ぷしの強い農夫」から「ほんとうの詩人」像を発見した。それは孤独な人間でありながら、強靭な精神を持つ人間である。彼は無限なる言葉の海において、人間実存の真実を探求する。詩「蟻」(『1999』1998) に描かれている「漁師のペテロ」、廃屋で「一人でツルハシをふるっている青年」は、田村の日本現代詩人としての自画像であるといえる。

要するに、IWP のメンバーとしての田村は、暫く「日本」という共同体から遠く離れ、単なる「詩人」として世界文学の交流に参加した。その後「日本戦後詩人」の田村像は希薄になり、「世界詩人田村隆一」として表象されるようになった。彼の IWP への参加は、日本詩人の国際交流に新しい方式を導入した一方、冷戦期の国際文学流史の一環と見做すことができる。それは今後の日本現代詩の比較文学研究に、新たな視座をもたらすものといえる。